

## ニュー・プリマーとしての「ピコラー」——トニ・モリスンの『青い目がほしい』

荒 このみ

1 アフリカン・アメリカンの「西」と「東」

W・E・B・デュボイスは、今では古典となつている『黒人のたましい』（一九〇三）で、アメリカの黒人の二重性を次のように述べている。

「アメリカ人であることと黒人であること。二つの魂、二つの思想、二つの調和することなき向上への努力、そして一つの黒い身体のかなでたたかっている二つの理想」（16）。

「アメリカの黒人」の歴史は、この闘争の歴史であるとW・E・B・デュボイスは述べている。アメリカ社会に生きるアフリカン・アメリカンにかかわる「西」と「東」は、ニューヨークのハーレム、シカゴのサウスサイド、ロスアンジェルス、ワッツ地区など地域性を備えつつ地理空間を離れて存在する「黒人社会」と、内であり外である「アメリカ社会」という二重性の中に読み取れるばかりでなく、「アメリカ市民」であり「アフリカン・アメリカン」であるという矛盾の中に存在する。

二〇世紀初めのW・E・B・デュボイスの魂からの叫びは、「なぜ神さまは、私を自分の家のなかで除け者にしたか、またよそものにしてしまったのだ」（15）という果てしなく解答不可能な問いかけであった。

それから百年、「アメリカの黒人」の状況は変わったのか。

『黒人のたましい』が出版されてから六〇年あまり経つた一九六〇年代半ばに、かれらアフリカン・アメリカンは、公民権法の成立によつてアメリカ市民としての権利、とりわけ投票権の確立による政治参加への保証を獲得した。けれども今日にいたるまで、かれらがアフリカン・アメリカンと呼ばれている現実に見られるように、「アメリカ人」にはなつていない。

かつてアイルランド人が黒人と同じように、あるいはそれ以下と見なされ差別されていたアメリカ社会であつたが、かれらは今日、十分にアメリカ人として認識されている。それは第三十五代大統領にアイルランド系移民の子孫であるJ・F・ケネディが選出されたことにも明らかであろう。アイルランド系移民への差別は、「奴隷のようだ」といわれながらも、奴隷制度のもとにおける奴隷ではなかったことによつて、アフリカン・アメリカンの宿命とはおのずから違つている。

アフリカン・アメリカンを同じ「少数グループ」としてアメリカ社会のその他の民族集団と比較することも可能であろう。だが何よりも「アメリカの黒人」は、その人口数において一割半強を占めていること、さらにアメリカの歴史的制度によつて人間性剥奪という境遇を強いられてきたという特殊な状況が、

他の民族集団とかれらの存在を異なるものにしていく。その差異を認識しながら、アフリカン・アメリカンにかかわる「東」と「西」をかれらの言語という視点から分析し、トニ・モリスンの『青い目がほしい』（一九七〇）における「アメリカの言語」の意味を探究するのが本論の目的である。

## 2 ブラック・スピーク

アフリカン・アメリカンの二重性、アメリカ人としての曖昧なアイデンティティを、言語に焦点を当てて考察しているのが、アントニオ・ブラウンの『真実』を構築する・演じる——ブラック・スピーチ・アクト』（二〇〇二）である<sup>1)</sup>。

これまでに、「ブラック・スラング」、あるいは比較的最近では「エボニックス」、として「黒人英語」を捉え、否定的に特質化する傾向があった。けれども二一世紀の今、ブラウンはそれを「ブラック・スピーク」と命名し、アメリカの言語におけるアフリカン・アメリカンの言語行為の文化的意味を探っている。

「ブラック・スピーク」とは英語の言語学的分析によって決定されるのではなく、ブラウンはそれを「文化的に質を高め、『一つの真実』を伝達する目的意識」を表象する言語であると定義する。ここでブラウンはミハイル・バフチンを援用し、「ブラック・スピーク」は「単一性言語」ではなく、「対話的言語」であるという。いわゆる「文化的ヘゲモニー」<sup>(216)</sup>を主張するアメリカの標準英語は、詩と小説の言語を分析したバフチン

の考察にしたがえば「求心的」であり、二声的でも多声的（ポリフォニー）でもなく、偏見のない「一つの真実」を効果的に伝達する言語にはならない。

ここでブラウンが強調しているのは、「ブラック・スピーク」が「一つの真実」を効果的に伝達する言語であるということである。決して「究極的な真実」、いわば大文字の真実を伝達する言語であると主張しているのではない。そのような「ブラック・スピーク」はアメリカにおいて馴染みの「方言」の一つであり、「言語行為」であるとブラウンは主張する。ここで使われている英語の「ダイアレクト」も、日本語の「方言」も誤解を招く用語であるが、ひとつの「表現体」という意味である。

「ブラック・スピーク」の行為は、これまで声を失っていた「アメリカの黒人」に文化的体験を想起させ記憶させるとともに、その結果としてアメリカの英語を重層的に構築することへ向かう。そしてそのようなアメリカの英語・文化の構築の行為を意識的に行っている作家がアフリカン・アメリカンの女性作家として初めてノーベル文学賞を授与されたトニ・モリスンである。

## 3 ブラック・スピークとしての『青い目がほしい』

トニ・モリスンは第一作の『青い目がほしい』において、「アメリカの黒人」の存在を描き出したのであったが、この作品はまさに「ブラック・スピーク」の行為の実践であった。モリスンは、これまで沈黙させられてきたアフリカン・アメリカンの

女たちの心理を描きながら、その日常的営みのなかでのアフリカン・アメリカンへの、そしてその女たちへの差別の構造があることを明らかにしようとする。この作品の構造的な特質のひとつとして、枠を担う文章が置かれていることが挙げられる。この作品を「枠小説」と見なすことができるのだが、各章の冒頭にはアメリカの国語教科書、「デイック・アンド・ジェイン」読本の断片が置かれている。だがそれは冒頭を修飾するばかりではない。「枠小説」としてこの作品の構造の一部になっているのであり、作品内容と深く関わって、いわばこの作品解釈の基本を成している。

その冒頭の断片に注目し、アメリカの国語教科書・読本と主軸となる物語との関連性を分析することによって、『青い目がほしい』という作品全体が、「ブラック・スピーク」の行為であることを検討していこう。

一九三一年から六五年にかけて三〇年以上にわたって使われた「デイック・アンド・ジェイン」読本は、多くのアメリカの子供たちがその人生において最初に接する英語の教科書であった。最初に学ぶ国語の教科書は人生に大きな影響を及ぼす。多くの小学校がこの教科書を採用し利用したということ、またこの教科書が三〇年以上の長い期間、アメリカの子供たちに英語を教えてきたという事実は、かれらの言語的行為・文化的行為にこの教科書が作用したであろうと推定してもそれほど的外れてはいない。アメリカには日本のような教科書検定制度があるのではない。それでもこの読本が「政治性」もなく単純に英語という言葉のみを教える教科書であるという主張

は成り立たない。

一般的にその国の国語読本は直接的にイデオロギーを表明するのではないが、読本を貫く物語を通してほとんど無意識のうち読者（生徒）の意識構造を作り上げ、あるいは変化させていく。表面上は「非イデオロギー的」であることがまさしくイデオロギーになるのは、トニ・モリスンが「非政治的であることは想像しうるかぎりもつとも明らかに政治的な姿勢である」<sup>2</sup>と断言していることにつながる。「デイック・アンド・ジェイン」読本では、まず第一にアメリカン・イデオロギーである「アメリカの理想の家庭像」がその読者へ刻印されていくのである。

これはアメリカの教科書に限られたことではない。小学一年生を対象にした最初の読本である「デイック・アンド・ジェイン」が、アメリカの子供にアメリカン・イデオロギーを植えつけたように、日本の国語教科書もまた同様にイデオロギーと無縁ではない。とりわけ検定制度のもとにある日本の義務教育における教科書は、イデオロギー的であることから逃れられず、政治・歴史の教科書はもちろんのこと、本来、言葉を学ぶ教科書である読本、国語教科書がすでに国家の政策と深く結びついている。「国語」と呼ばれることじたいにすでにイデオロギーが作用している。ある日本人の間において「神の国」という発想が死滅していないのは、最初に刻印された国語教科書の影響が潜在意識に残っているからではないか。国語教科書についての研究は近年盛んだが、入江曜子著『日本が「神の国」だった時代——国民学校の教科書をよむ』（二〇〇一）は、いかに「神

の国」思想が教科書を通して浸透したかを分析している。

これによれば一八八六年に教科書検定制が敷かれて以来、最初の四回の国定教科書改定はすべて対外戦争に勝利したときであり、第五回目は一九四一年三月一日に公布された国民学校令に伴い改定がなされている。いずれの場合も戦争という国家的事業と深く関わって改定が実施されるのであり、国家のイデオロギーと教科書作成は切り離せない。

戦前に行われた最後の改定は、戦争へ突入していく日本が天皇を中心に据えた思想基盤を築くために行う「皇民教育」の目的をもってなされる。国民学校は一九四一年から始まり、最初の一年生が卒業する六年後の一九四八年に廃止になる。一九四五年の敗戦を迎えて、その教科書は軍国主義時代の過去の遺物とみなされる。ところが、『日本の「神の国」だった時代』によれば、戦後第六期の教科書改定には第五期の教科書と同じメンバーが残り、それが戦後半世紀以上も続くいわゆる「教科書問題」を引き起こしているという。今日でも「この皇民教育のイデオロギーは地下水脈となつて」(5) いると著者は主張する。それが「神の国」という発想を温存させているのだろう。子供時代に国語教科書を通して刷り込まれたイデオロギーが、その個人の精神的基盤から消え去ることは難しい。

八〇年代以降に注目を浴びた「ディック・アンド・ジェイン」読本の分析・研究にもそれは明らかである。たとえば『犠牲者としてのディック・アンド・ジェイン——子供読本における性のステレオタイプ』(一九七二)が一つの例で、この本では「ディック・アンド・ジェイン」を出版したスコット・フォ

アーズマン会社の教科書ばかりでなく、その他の出版社による読本を含めた合計一三四冊の小学読本を対象に、男女の性差のステレオタイプがいかに作り上げられているかを分析している。ジェンダーというイデオロギーが教科書を通して生み出されていくことが指摘され分析される。

それではアメリカの「国語教科書」が、その歴史の中でいかに生成されてきたのかを振りかえってみよう。

#### 4 アメリカのプリマー・「国語教科書」

アメリカにおいて歴史的にもっとも影響力のあつた英語教科書は、「ニュー・イングランド・プリマー」において他にない。「ニュー・イングランド・プリマー」はボストンのベンジャミン・ハリス(一六七三—一七二八)によつて一六八九年頃に刊行されて以来、一九〇〇年まで二一〇年間にわたつて使われ<sup>3</sup>、控えめに見積もつて六百万部が印刷されたと推定されている<sup>4</sup>。アメリカの植民地時代から建国の時代を経て、二〇世紀に入るまで何百年という長期間にわたつて使われた初級読本が、アメリカ人の精神構造に与えた影響が浅からうはずはない。

『プリマー』では聖書の物語に基づいてアルファベットが教えられ、聖書の十戒が英語の文章構造の理解と作文能力の養成の例に挙げられ、教義問答が英語のみならず道徳の教えとともに模範例として挙げられている。そのような教科書でアメリカの子供たちは英語を学習していったのだが、教科書を通して学校においても、当然のこととしてキリスト教に基づいた教育を

受けたのである。

「アメリカの教育システムは聖書に基づいていたのであり、人間の（恣意的な）知性にはなかった」<sup>5</sup> というヴォーン・シャッツアーの、「聖書教育」によってよりよき教育を施してきたという意見は、その前半においては事実である。合衆国憲法は、「権利の章典」と呼ばれる憲法修正第一条によって、「国教を樹立し、もしくは自由な宗教活動を禁止」する法律を制定してはならないと信教の自由を保証しているが、現実生活においては、キリスト教がアメリカ人の精神的土壌だったのである。そこに他の聖典や他の宗教が入り込む余地はなかった。憲法における「自由な宗教活動」の保証とは、キリスト教の異なる宗派の活動を想定しているものであり、他の宗教を想定してはいなかったと思われる。そしてその精神的基盤の育成に、初級読本「ニュー・イングランド・プリマー」の役割がきわめて大きかったことは異論の余地がない。

「ニュー・イングランド・プリマー」は、歴史的な意味を担ってよく知られている教科書だが、それだけではなく、「アメリカン・プリマー」、「ボストン・プリマー」などいわゆる「ノン・ニュー・イングランド・プリマー」と呼ばれる教科書群が、少なく見積もって、一九世紀前半までに四百万部という部数で印刷されている<sup>6</sup>。これらの教科書もまた「ニュー・イングランド・プリマー」と同様に、英語の習練と同時に「宗教教育」を目指していたのであり<sup>7</sup>、アメリカの初級読本の第一目的は「宗教教育」を前面に出しながら英語を教えることにあった。

このようにアメリカの初級読本は一九世紀にいたるまで、キリスト教という宗教的イデオロギーと深く結びついていた。キ

リスト教的道徳観が浸透していたのである。

一九世紀はアメリカ文化が、すなわちキリスト教も含めて「女性化」した時代だったという考察は歴史家のアン・ダグラスによるが<sup>8</sup>、私はこの時代をキリスト教を基盤にした「ホーム（家庭）信仰」が発展した時代であると見なしている。一八七五年頃になるとアメリカのプロテスタント教会は、信仰の度合いを教義や戒律の遵守によって計るよりも、「家庭道徳・市民の責任・世間的つき合いとしての教会礼拝への参加」<sup>(6)</sup>によってキリスト教徒であることを確認するようになっていった。それを教会の「家庭化」あるいは「市民化」と呼ぶことができるだろう。良きキリスト教徒は良き家庭人であった。その社会的単位を構成するために結婚は必然であった。アメリカの女たちにとっては「家庭の天使」になることが人生の目標であり理想になっていった。そしてその理想の追求のためには結婚が必然の過程であり、したがって結婚制度がよりいっそう強化されていったのである。ストウ夫人の『牧師の求婚』（二八五九）や『妻と私』（一八七二）は、まさに一九世紀の家庭のありかたを描いた文学作品で、アメリカの女たちはこのような作品の女主人公の人生と自分の人生を重ね、あるいは比較しながら理想を思い描いて自分の姿を映し出し、作り上げようとしていったのだった。

いわゆるセンチメンタル・ノヴェルが隆盛を見る一九世紀半ばは、小説の主人公もまた「女性化」していったが、それは外の世界を志向するより、家庭を強調するものになった。一八四〇年代には聖職者の偉人伝が人気を博していたというが、女たちがこのような伝記を執筆するようになると、その描

写の重点は家庭の内部へ移っていったのである。「ユニテリアン派や会衆派の牧師の娘や妻、友人の記す回想記の主眼は、家庭を舞台にして家庭内のことを描くことにあつた」(229)とアン・ダグラスは述べている。また一方では家事やマナー・育児に関する「ハウツー文学」、アドヴァイス・リテラチュア(人生相談文学)が盛んに出版されるようになる。これらの「アドヴァイス」を通してアメリカの主婦の理想像、アメリカの家庭のあるべき姿が読者へ具体的に刻印されていったのである。

一九世紀半ばは「母親の帝国」<sup>9</sup>であつたとも言われるが、初級読本の教授法と母親の役割の歴史を記述しているのが、パトリシア・クレインの『Aの物語——「ニュー・イングランド・プリマー」から「緋文字」までのアメリカのアルファベット化』(二〇〇〇)である。このなかで著者は、一九世紀においてアルファベットの習得・教育が母親あるいは女教師たちに任せられるようになったと述べ、英語教育におけるジェンダーの役割を論じている。

アメリカの女子の識字率は一七八〇年頃から一八四〇年頃までに二倍に高まったと言われている<sup>10</sup>。そのような状況の変化のなかで、「国民の識字に関して女たちは読者・作家・生徒・教師としてますます中心的役割を担うようになった」<sup>11</sup>とクレインは述べている。小さな子供たちに英語を教えるという基本作業を母親が担いながら、母親は「母親の声と身体」(104)も教え込むことになるのであり、それによって子供たちは母親の姿、その理想像を描いていくことになる。

リディア・マリア・チャイルドは『母親の本』のなかでアルファベットの学習に際しての母親の心構えに関して次のよう

に助言している。

「子供が新しい単語を綴ることができたらキスをしてやりなさい。サー・ベンジャミン・ウエストはこう語っています。幼い妹の似顔絵を描いて母親に見せたときに母親はたつぷりほめてキスをしてくれた。『あのキスが私を画家にしたのです』<sup>12</sup>。」

説明よりも何よりも幼い子供にとっては母親の「微笑みと渋い顔」が意味を持つのであり、生涯にわたってその人生に影響する印象を残す。アルファベット教育を通して母親あるいは女教師たちは子供たちにしつけや道徳を教え込む。このような初期の教育が人格形成に大きな意味を持つことは否定できない。

一九世紀の母親の存在は人間を越えて、時代の人類の教育を担う神に近い存在になっていった。そうやって理想化したのが「家庭の天使」という呼びかたであつた。また母親の声は「新しいイヴの声」<sup>13</sup>であるとして、母親像を原人アダムに連れそいうイヴにたとえることもあつた。子供に周囲の物の名前を教え、綴り字を教える母親は、「その声の音によって世界のあらゆる物を母親の権威のもとに引き寄せるのである」(125)とクレインは語る。母親が教える教科書のなかの物語は、もはや聖書物語ではなく世俗の物語なのだが、母親の言葉が神の存在を認識させ、神はいついかなるときにおいてもあらゆるものを見渡しているという言葉に呪縛されていくのである。子供は母親の「微笑みと渋い顔」を思い出しながら、母親の教える「全知全能の神の目」を恐れるようになる。

一九世紀のアメリカ社会では、プリマーの教授を通して母親の存在が子供たちに強く認識され、子供たちの心理を深く支配

するようになっていった。女性雑誌の編集者で作家のセアラ・ヘイルは、「精神高潔な模範としてのレディの役割」<sup>14</sup>という表現で家庭における夫と妻の役割分担を定義し、金銭を稼いでくる夫に対して金銭には手を染めない妻の立場の精神的優越性を主張する。いつぼう一九世紀半ばの教会では、女の教会員が多数になったという資料の数々をダグラスは『アメリカ文化の女性化』のなかで紹介している。ストウ夫人の弟で牧師のヘンリー・ウオード・ビーチャーは女性信者を集めるので有名になった牧師でもあるが、たとえばインディアナ州ローレンスバーグに創立した最初の教会では女の教会員は一九名で男は一名だったという<sup>15</sup>。けれどもいかに女の信者が増え、礼拝に出席するのは女の勤めであるかのような世間的習慣が根付いていったとはいえ、教会の重大事を決定する議決権は常に男が握っていたこともダグラスは忘れずに指摘する。女性の権利を主張する運動が盛んになっていった時代だったが、聖職者たちは女が政治的平等を獲得することには断固として反対していた。教会が女たちによって支配されることを極度に恐れていたのである。女が聖職者の地位につくこともなかった。その意味ではいかにアメリカ文化が「女性化」したとはいえ、アメリカの女に対する政治的・社会的不平等が存在することに変わりはない。ピューリタンの父権制社会の精神土壌がアメリカ社会の根底を成していたのである。

学校で使用される読本は、英語を教えることにその第一目的があったにしても、それと同時にキリスト教の精神基盤、ピューリタンの父権制度を教えることにも重要な役割があったことは否定できない。「ニュー・イングラント・プリマー」は、

二〇世紀を迎えてもはや支配的な英語教科書ではなくなっていたが、初級読本の内容がいかなるものであるべきかは、アメリカ社会の基本的な精神の構築にかかわる重要な課題であった。

##### 5 「ディック・アンド・ジェイン」読本

「ディック・アンド・ジェイン」読本を詳説することによって、その背後でいかなるイデオロギーが働いていたのか、あるいはこの教科書で英語を学ぶことによって、いかなるイデオロギーが生み出され強調されたのかを明らかにしていきたい。

「ディック・アンド・ジェイン」読本が構想されたのは、それまで使われていた教科書への反省からであった。文字を暗記させ、難解な文章を読ませることに重点がおかれていたそれまでの言語教育から、もつと身近な人物・出来事・経験を取り入れて、子供たちに馴染みやすい題材を扱った読本にすることが目標の一つだった。視覚的にわかりやすい教科書もまた目標の一つで、ふんだんに絵が取り入れられることになった。

教科書作成チームには、教師ばかりでなく、編集者・作家・心理学者などが入っていたが、主人公になる少女少女には、四字の覚えやすい名前を命名することが考えられた。それで選択されたのがディックとジェインであったが、二人に苗字は必要ない。なぜならディックもジェインもどこにでもいるような「オール・アメリカン・ボーイ」、「オール・アメリカン・ガール」であり、すべてのアメリカの少年少女を代表しているという前

提だからである。

ディックは長男で独立独歩のしつかりした男の子。強い個性を持つているようだが、実はその個性を強く主張することのない、誰からも好かれるアメリカの少年の「典型」として登場する。ディックは二人の妹ジェインとサリーのリーダーで、妹たちは兄の言うことに素直に従う。ディックはいつも何かをしている。自転車に乗ったり、凧を揚げたり、犬に餌をやり、しつかけたり散歩をさせたり退屈することはない。また庭の芝生に水をやり、食卓の準備をする。大人の前で礼儀正しく、機嫌が悪くなったり泣き喚いたりしない。妹にとってディックは頼もしい兄、親にとつては素直な良い子。

すぐ下の妹のジェインは金髪で輝く瞳の健康的なかわいい女の子。太り過ぎてもいけないしやせてもない。自分よりも仲間を優先し、一番しあわせなのは家族と一緒にいるとき。思慮深く失敗することはない。兄のようにうまく自転車に乗ったり、早く走ったりできないが、一生懸命に努力する。台所で母親の手伝いをし、妹のお守りもする。かんしゃくを起こしたり泣いたりする問題児ではない。なによりもジェインはいつもかわいらしい素敵な洋服を着ている。その洋服が汚れていたり皺くちやになつていない。兄にからかわれたりしない。幼い妹の憧れの対象。両親・祖父母にかわいがられている。夢のようにしあわせな女の子。

唯一のいたずらっ子は三歳のサリーで、無邪気に自分の意志を通し、泥んこになつて走り回っている。活発な振るまいに周囲の者は笑いを誘われる。

父親は若くてハンサムで背が高い。家族への思いやりは深

く、穏やかな性格。忍耐強く子供たちに縄跳びを教え、肩車をしてやり、子供たちが自分を必要とするときには、決して拒絶しない。職業は何か明らかではないが、出世の道を歩んでいる。「完全家族」に囲まれ満足している父親はいつも微笑んでいる。

母親は美しくエレガントで、かしく女らしい。家事を完璧にこなし、居心地のよい家庭を築いている。ディックとジェインを信頼し、子供たちに対して威圧的になることはない。ふんわりしたワンピースを着て、髪の毛一本乱れることなく、家事が終わるとソファに腰掛け静かに雑誌を読む。専業主婦の母親は深い愛情を家族へ注ぐ。

農村地帯に住む祖父母がいるが、ディックとジェインの家族は核家族で、初期の読本では隣人も登場しない。ペットの犬と猫が出てくるのみ。

登場人物の性格描写から読み取れるのは、それぞれの個人としての「完全性」である。少年として少女として息子として娘として、そして母親として父親として完全なのである。「オール・アメリカン・ボーイ」は完璧でなければならぬ。このように完全無欠な人間が世の中に存在するはずはないのだが、「オール・アメリカン・ボーイ」であるディックをはじめとして家族のそれぞれが完璧であり、強い個性や否定的な性質を持つてはいない。あらゆる否定的な人間的性質が排除されたプラスチックのような性格の人間集団がディックとジェインの一家である。この世の中に駄々をこねない子供が果たしているだろうか。泣かない子供がいるだろうか。叱らない親がいるのか。怒鳴らない親がいるのか。ディックとジェインの両親は怒ることなく、いつも微笑んでいる。そのような父親と母親こそアメリカの親の

理想像であり、「ディック・アンド・ジェイン」読本で育った世代は、自分たちもまた同じような父親・母親にならねばならぬという強迫観念にとらわれていく。

理想の家族は、同じような郊外の家に住み、同じようなものを食べ、同じような服装をし、同じような趣味を持ち、日曜日にはだれもが同じように庭に出て家族一緒に庭や家や車の手入れをする、そのまわりを猫や犬が駆け巡っている。この同一性のなかにコンフォーミティの時代の人々は安心感を抱いたのであり、そこからはみ出ることへの不安感を抱いたのであり、いつぼうで画一化・同一化に反旗を翻す人々には容赦がなかった。それは自分たちの安心感を揺るがすからであり恐怖心を掻きたてるからである。政治的意図によつて作爲的に掻きたてられた共産主義への恐怖心が、レッド・パージを引き起こしたのはこの時代であった。コンフォーミティの思想は排除の思想につながっていく。

「オール・アメリカン」に求められている「正しい」行動の型は、常ににこやかに笑い、楽しくおしゃべりに興じ、何か仕事をし、退屈をしないことである。「ディック・アンド・ジェイン」の世界はそのようなアメリカの価値観をあらわしている。カヴァーガールの「健康的な」笑顔がとりわけアメリカン・ガールには求められていたが、このように強制される笑顔は決して「健康的」であるはずはないのだが、あらゆるものの「陰」の領域が忌み嫌われたのである。「陰」を否定することによつてより健康的になるというのは近代主義のひとつの傾向であるが、それがアメリカにおいての現実にならうとしていた。一九世紀のヨーロッパに起きた科学合理主義の大衆化がア

メリカで起きたといえるだろう。一八五一年にロンドン万国博覧会で建設された水晶宮は人々の耳目を引いたが、そこでは透明ですべてが「陽」の世界になる館が美しいとされたのだった。「陰翳礼讃」の美は、あるいは人間同士のありかたはアメリカ的な「理想の世界」からは消えていく。

聖書の物語を解釈すれば、アダムとイヴがエデンの園から追放されないかぎり人間の生きる営みは始まらなかつた。「陰」のない健康的な楽園において「永遠の豊かさ」のように見える非時間空間に存在する間は、アダムとイヴは「原人」であつたが人間ではなかつた。蛇のささやきという「陰」を体験することによつて初めてかれらは人間になつていく。だが初級読本「ディック・アンド・ジェイン」の世界に生きる人々はまだエデンの園の中にいる。絵に描かれたアメリカの楽園の中にいるのである。

「ディック・アンド・ジェイン」読本は、絵を多く採用し、ヴィジュアル化することがその改良点の一つだったが、そうすることによつて単語習得の役に立つと考えられたからであつた。その特徴から何を読み取ることができるだろうか。

ディックとジェイン一家の家族構成に注目すると、この一家の第一子は男の子であり、女の子が二人続く。息子か娘かどちらかいつぼうではなく、子供たちの年齢差は理想的である。犬と猫を飼っている。父親は背が高く、母親は父親ほど高くはないが低いわけでもない。「スモール・イズ・ビューティフル」と叫ばれるようになる以前のアメリカ社会では、のみの夫婦は嘲笑的に見られていたが、この夫婦はその点でも理想的である。父親も母親も太りすぎでもやせすぎでもない。子供たちは

三人とも普通の顔立ち、まだ幼い娘は飛びぬけて美人という評価をする年齢に達してはいないが、その表情は愛くるしく、だからからも愛される女の子である。そのうえ常にかわいらしい洋服を着ている。「ディック・アンド・ジェイン」の読本が刊行され続けた四〇年間で、ジェインは少なくとも二百着の色とりどりの洋服を着たという。それもまた豊かな社会のアメリカを印象づけたのである。

そして何よりも印象的なのは娘も母親も三人ともに金髪であること。父親と息子は茶色の髪の毛で金髪ではない。女たちのみが金髪であるのだから、そこにジェンダーのイデオロギーが働いていないはずがない。これには注釈が必要だが、「ディック・アンド・ジェイン」の最初の版では、かれらは金髪に描かれてはいない。早い段階であるが、途中から三人の女たちが、金髪になっていったのである。その改変の背後でいかなる討論がなされたのかは知る由もないが、金髪碧眼が美の基準であり、マリリン・モンロー主演映画の題名が「紳士は金髪がお好き」であり、「フェア・レディ」の文学的伝統があるなかで、それに則った変更がなされたのであった。公立小学校で使用される初級読本に、すでに一方的な身体的価値基準が刷り込まれていく。ヴィジュアルになった結果、人物像や行動の規範が「言葉を通さずに」具体的に読者へ伝達されるようになっていったのである。それが「ディック・アンド・ジェイン」読本に備わる特殊な力になっていった。肯定的にも否定的にもなりうる力であった。

核家族で完全家族のディックとジェイン一家では、中心を占める父親が「ノー」という言葉を口にすることは一度もな

い。「ノー」という否定の言葉、陰を作る言葉のない世界である。父親は常に精力的で何かの作業に取り組んでいる。壊れたおもちゃを直し、バードハウスを庭に作り、車を洗う。すべてが家族のための作業である。父親も母親も「完全な家庭生活」を築くために時間を費やしている。子供たちを子守りに預けて二人が音楽会や芝居へ行ったり、一人で部屋にこもって読書をする場面が強調されることはない。家族全体が一つの行動単位になっている。休日になると家族は一緒に父親の運転する車に乗って農村に住む祖父母を訪ねる。

以上のように、教科書に載った絵や、家族と一緒に行う共同作業の場面を通して、子供たちは英語を学ぶばかりでなく、「普通の」家庭生活のありかたを視覚的に刻印されていく。「ディック・アンド・ジェイン」読本のみならず、その他の英語教科書を含めて、アメリカの理想的な人間の規範を教え込む教科書になっていく。

美しい登場人物と楽しい暮らしが強調される「ディック・アンド・ジェイン」の世界は、あまりに理想的であるために、アメリカの「普通の」家庭を登場させるという前提であるにもかかわらず、現実性が喪失している。『ディック・アンド・ジェインと一緒に育つ』（一九九六）の編者は、それを次のように説明する。

「夜が決してやってこない、膝に擦り傷のない、親が怒鳴ることのない、そして面白いことが絶えず起きる世界」<sup>16</sup>

すなわち現実にはない世界であり、幻想の世界である。けれども教科書で毎日教え込まれるアメリカの子供たちは、そこに描かれた家族像があるべきアメリカの家族の姿であり、自分の

家庭とはかけ離れていても世間一般の普通の家庭なのだろうと錯覚していく。それはさらに強迫観念になって、現実の自分の家族との落差に劣等意識を植え付けられることにもつながる。

「ディック・アンド・ジェイン」読本は、「ニュー・イングランド・プリマー」を越えることはなかったが、一九五〇年代には全米の八〇パーセントの小学生がこの教科書で英語を学んでいる<sup>17</sup>。二〇世紀の後半から二一世紀を迎えた今日のアメリカ社会を構成する大多数のアメリカ人が、「ディック・アンド・ジェイン」読本で英語を習得し、そのイデオロギーに影響されながら育ってきたのである。

## 6 アメリカの夢と「ディック・アンド・ジェイン」読本の終焉

「ディック・アンド・ジェイン」読本が企画され出版された当時の三〇年代は、アメリカは不況の時代であった。夢を追いかけるよりも現実の暮らしに追われる時代だった。「ディック・アンド・ジェイン」に描かれるアメリカの家庭生活には、おそらく自分たちもいずれそのような豊かな暮らしをしたいという願望が込められていただろう。四〇年代の第二次世界大戦を経て、戦争がすばやく過去の出来事になった五〇年代になると、アメリカはいわゆる「豊かな社会」を迎える。「ディック・アンド・ジェイン」で描かれるアメリカの家庭像は、ちよつと努力すれば、ちよつと背伸びすれば自分たちも同じような「アメリカ人」になって、同じような豊かな暮らしができる現実的

な姿を提示していると思われるようになった。

この時代にアメリカのテレビ・ドラマは、いわゆる家庭物、ホーム・ドラマが人気で、それは私たち日本の視聴者も夢中になって見る番組になった。たとえば「パパは何でも知っている (Father Knows Best)」（一九五四―六二）や「うちのママは世界一 (The Donna Reed Show)」（一九五八―六六）など、日本でも放映されていた番組が五〇年代のアメリカ社会で人気があつたのは、「ディック・アンド・ジェイン」のような世界がかならずしもおとぎの国の話ではなく、アメリカ社会では現実あるいは現実のほんの少し先を行くドラマであり、身近に感じられたからであろう。アメリカの中流階級の暮らしは、世界の人々の憧憬の的であり、映画ではドリス・デイ主演の「ママは腕まくり」のようなシリーズが人気を博していた。

映画「ママは腕まくり」で象徴的に描き出されているように、大都会で仕事のある父親と、理想の子育てをしようと郊外の一戸建てに引っ越すことを願う母親という設定は、もちろん母親に軍配があがつた。街中のアパートから教育環境が良いとされる郊外の一戸建てへ引っ越して行くことが両親の教育責任であると見なされ、かれらの現実的な「アメリカの夢」になった。五〇年代のサブバーブ現象である。

戦争終結からの一〇年間に、アメリカでは千三百万戸の家が建築され、そのうち千百万戸は新しく開発された郊外地区に建設されたという<sup>18</sup>。近代化された模範的な家々の立ち並ぶ典型的な郊外の町がレヴィットタウンだった。一九五九年に訪米したソ連のフルシチョフ首相をアイゼンハワー大統領はレヴィットタウンへ案内しようとして申し出る<sup>19</sup>。レヴィットタウン

はアメリカの誇る理想の郊外住宅地で、自由主義国アメリカではだれもが新しい一戸建てを自分のものにする事ができるという例だった。この年、モスクワで開かれた「アメリカ展示会」にはアメリカの家電製品を中心にして、アメリカのモデルハウスの内容が強調された。近代設備の整った最新スタイルの台所や、テレビ・冷蔵庫・洗濯機・食器洗浄機・調理設備を展示したこの展示会は、さながら「アメリカン・ショウケース」で、「アメリカン・ウエイ・オブ・ライフ」を売り出す機会だったといわれている<sup>20</sup>。「フレンドリー・アイク」の時代だった五〇年代にアメリカは、「理想の家庭生活」を世界に誇示し、資本主義的に売り出していったのである。「ディック・アンド・ジェイン」の家族もまた当然のことながら、庭や自然のない都会の真ん中のアパートではなく、すでに郊外の一戸建てに住んでいる家族だった。理想的なファミリー・ライフを享受しているアメリカの中流の家族である。すなわち「ディック・アンド・ジェイン」読本は、「アメリカの夢」をそのまま表象していたのである。

アメリカ的価値観を信奉し、その社会規範に順応するコンフォーミテイの五〇年代を経て、六〇年代半ばに「ディック・アンド・ジェイン」読本が終焉していくのは、まさにアメリカ社会の変容の兆しであった。「アメリカの夢」への疑義の提示であり、「ディック・アンド・ジェイン」読本に即して言えば、アメリカの女たちはすべて金髪碧眼なのではない、男たちの背が高いのではない、父親はいつも笑って子供たちのためにおもちゃを直してやっているのではない、母親はやさしく微笑んでいるのではない、面白いことばかりが起きるのではない、それ

らがすべて美の基準・社会規範にはならないという強い反論の表明であった。日常の現実世界には「ノー」があり、否定があり、「陰」がある。あまりにも健康的に見えるディックとジェインたちは、実はアメリカの「健康信仰」の罠に陥った、「非健康」的な姿を見せていたのである。

「ディック・アンド・ジェイン」の世界が「健康」的なのではなく、かえって「非健康」的であることを鋭く指摘し、小説作品のなかで展開したのがトニ・モリスンであった。それをモリスンは第一作の『青い目がほしい』で実践している。

## 7 「ディック・アンド・ジェイン」の破壊的断片

モリスンはこの作品で「ディック・アンド・ジェイン」読本の断片を「枠」に使う。その「枠」をなす断片の役割に関しては、すでに多くの分析がなされている。

ドナルド・B・ギブソンは、「このプリマー・テキストは、テキストとカウンターテキストとの明白な関係はなく背後に横たわっている」のであり、カウンターテキストとしては、教育システムを通して支配的な文化がヘゲモニーを運用する陰険なやりかたが示唆されていると分析している<sup>21</sup>。ギブソンの主張するような、断片的「枠」と主軸の物語に有機的な関連はなく、「背後に横たわっている」だけであるという断片的「枠」の矮小化は、トニ・モリスンの作品解釈には当てはまらないだろう。「ディック・アンド・ジェイン」読本を選んだこと、それが破

壊的断片であることにモリスンのたくらみと意図がないはずはない。対話的言語である「ブラック・スピーク」の行為によつて、アフリカン・アメリカンの「一つの真実」を描き出そうとするモリスンは、「背後に横た」えるためだけに断片をそこに置くことはない。

これまでの『青い目がほしい』の作品分析において、アフリカン・アメリカンの登場しない小学校の初級教科書と、白人のほとんど登場しない物語との対照を指摘するものは多い<sup>22</sup>。その内容はテレサ・M・タウナーによる、「小説はディック・アンド・ジェインの物語で始まる。教科書のなかの家族の物語——白人の——は、クロード・ディアと偏在するナレーターによつて生み出される粗い肌触りの物語と截然たるコントラストを成している」<sup>23</sup>という指摘に収斂されるだろう。

たしかに「ディック・アンド・ジェイン」に登場するアメリカの家族と、物語に登場するアフリカン・アメリカンの家族は強烈なコントラストを成している。けれども物語の「枠」に使われた、作者によつて選択され書き直されたプリマーの断片を詳細に読み返すと、作者がこの「枠」によつてコントラストを強調するだけではないことが理解されてくる。

『青い目がほしい』の物語は、「ディック・アンド・ジェイン」読本の断片の、三つの書き換えから始まる。最初の断片のみが文法的に意味を成す構文で記され、第二の断片は単語と単語の間隔は確保されているものの、もはや句読点は外され「意識の流れ」のように記述される。第三の断片は出だしの大文字は残されているものの、後はスペースもなく小文字の連なりである。そして後に章立て代わりに引用される小断片は、小文字

からゴシック体の活字に変化し、単語も突如として切断されアルファベットの塊になる。

『青い目がほしい』の第一行目は「ここにその家があります」という教科書の文章で始まる。これは第二行目の「ここにその家族がいます」という文章と連動しているが、両方ともに不定冠詞ではなく、定冠詞「その」が使われていることに注目せねばならない。一戸建ての「家」も、登場する「家族」も、定冠詞によつて一般化されるとともに究極化されている。定冠詞によつて家と家族の決定的な代表性が強調され、アメリカの理想の「家庭」がそこに特定されて描き出される。その家は緑色と白色で、赤い扉がついている。「母親、父親、ディックとジェインがこの緑色と白色の家に住んでいます」と続く文章では、その家は「とても美しい」と描かれ、家族は「とてもしあわせです」と描写される。すなわち緑と白のペンキの塗られた家が美しい家になり、その家に暮らす家族はしあわせになる。ここでは直接話法ではなく間接話法が取られ、この家とこの家族がとても美しくとてもしあわせなのが、一般的事実になつていく。

この断片の物語ではジェインが中心にいて、赤い服を着たジェインが遊びたがっている。猫と遊びたいのだが、猫は一緒に遊んではくれない。母親も笑うだけ。父親も微笑むだけ。犬は逃げて行く。ようやく友達がやってきて二人で楽しく遊ぶ。

ここでは色彩をあらわす形容詞が頻繁に使われ、ヴィジュアルな要素が生まれる。ジェインの赤い洋服は、色彩の一つを選んだというだけではなく、「かわいい」色合いとして選ばれる。その洋服を着ているジェインは、すでにかわいらしい女の子であることが暗示される。母親は「とてもすてき(ナイス)」

と形容され、父親は「大きくて強い」と描写され、父親の身体的な特徴が述べられるが、その性格に関しての言及はない。ディックについての人物形容は出てこない。

このような事実から何が読み取れるだろうか。

女の子ジェインは最初誰も相手にしてくれないが、友達がやってきてようやく遊びに興じる。いつぼうディックはしばしば面白いゲームを考案する。ジェインは、知性を働かす生産的な作業に取り組むことがなく、ただ「かわいい」だけで存在する。母親は「とてもすてき(ナイス)」だが、父親のように「強さ」を発揮することはない。父親は「強い」かぎり、その性質がどのようなものかは問題ではなく、母親と同じように「すてき」な人物であるかは問われない。

このようなステレオタイプの人物描写が、毎日のように教科書を通して教え込まれ、学校という権威によるために「正式な諒解」を与えられた、お墨付きを得た理想像になっていく。「体制」によって押しつけられる一つの価値観に、ディックとジェインとは違った家庭背景を持つ子供たちは戸惑いを覚える。『犠牲者としてのディック&ジェイン』を著わした調査グループの報告によると、この教科書で英語を学ぶ子供たちは、次のような二つの選択肢から自分の態度を選ぶという。「自分たちの家族は非典型的、アブノーマルであり、自分たち自身をまた家族を非難する。社会規範に無理にあわせる。完全に所属することのできない社会を拒否する」(33)。

このうち「ディック・アンド・ジェイン」の家庭像の規範を、「非現実的であり、展開される考えかたは有害である」と見なす子供たちは、州政府「公認」の教科書にさらされることによつ

て、「当局の認めた」と見なされるアメリカ文化に対して不快感を覚えるようになる、と報告書は伝えている。

三つの選択肢に照らせば、『青い目がほしい』に登場するアフリカン・アメリカンの主人公は、「社会規範に強制的に同調(コンフォーム)する」ことはない。かれらの家庭は、読本に描かれる家庭とは違っている。郊外の美しい一戸建ての家ではなく、町なかの店舗兼住宅やアパートに住んでいる。明るい白いペンキではなく暗い緑色に塗られている。やさしい母親とたくましい父親がにこやかに笑っていることはなく、庭で犬や猫と遊んだり、水撒きをする暮らしではない。何より女の子たちは金髪碧眼ではなく、かわいらしい色鮮やかなワンピースを着ていない。飢えのために「ごみをあさる」ことさえする黒人の子供たちである。

けれども登場人物のローティーンの女の子たちは、自分たちの世界とは異なる家庭像が描かれた教科書の中の世界に対して、それを「規範を非現実的であり、展開される考えかたは有害である」と認識するほど成熟してはいない。はつきりしないままに教科書に描かれた理想の世界に対して違和感を覚えている。それが『青い目がほしい』の出だしの文章、「誰も口にしなかったけれど、一九四一年の秋、マリゴールドの花は咲かなかった」という打ち明け話に込められている。種を植えても花は咲かず、新しい命は誕生へ到らず、そして「無垢(イノセンス)」が死を迎えるという物語を導入する最初の一行である。

語り手のクローディア姉妹は、花が咲かなかった原因が自分たちにあると当時は感じ、「わたしたちの種からは緑の草花が生えない」(9)と失望する。だが現実には、クローディア姉妹

のマリゴールドばかりでなく、どこの家のマリゴールドも咲かなかったのだった。そのことを知るのには、後になってからである。「わたしたちの純真さ（イノセンス）や信念は何も生産しない」（9）と考え、「ピコーラと不毛の土地しか残らない」（9）とクローディアは語る。なぜなのだろうか。その「理由（ハワイ）」を述べるのは至難の技であるから、その代わりに「どのように（ハウ）」（9）をこれから物語ろうと主人公は言う。

たしかに「わたしたちの」という所有格が強調されると、他の種、他の土地ならという前提があるように了解される。だが「誰のマリゴールドも咲かなかったのだ。湖に面した庭のマリゴールドさえ、あの年は咲かなかった」（9）という説明が続いてなされる。この説明は注意せねばならない。湖に面した庭つきの家の持ち主はだれなのか。それは家政婦を雇うことができる、中流階級の豊かな白人である。「湖に面した家々は一番きれいだった。庭に置かれた道具や飾り物。窓は輝く目がねのようだった」（84）と称えられ、「あの大きな白い家には花が一杯の手押し車がある」（82）と描写されている。クローディアの友達ピコーラの母親は、その白人の家の家政婦として働いている。

マリゴールドはその白人の家の庭にも咲かなかった。「生み出さない土地」は、アフリカン・アメリカンが住む場所だけではない。白人の家の庭、理想的な美しい庭に植えても咲かなかったのだ。この最初の前提の文章をよく理解すれば、理想の家庭ですらときには何も生み出さないことが、この段階ですでに作者によって指摘されていることが諒解されるだろう。引用された断片的な教科書「ディック・アンド・ジェイン」の理想

的な家庭像と、続く物語に登場するアフリカン・アメリカンの貧しい家庭像は、必ずしも両極的な対照をなしているのではない。

「粹」に引用された「ディック・アンド・ジェイン」読本の断片は、音のない世界である。母親は微笑み、父親は笑うのみ。一緒に遊ぶとも遊ばないともかれらは声に出して言わない。かれらのしあわせそうな沈黙が、ピコーラの表現しがたい抑圧された沈黙に対応する。

しかしながら「ディック・アンド・ジェイン」の親たちは、その沈黙によって「しあわせ」をあらわしているのだろうか。モリスンは、沈黙によってかれらの語らないもの、聞こえないもの、見えないものをあらわしているのではないか。常に「すてきな」母親であることの苦痛や、常に「大きく強い」立派な父親であることへの不自然さと不健康さを沈黙があらわしているのではないか。

喜び怒り哀しみ楽しむのが人間の自然な感情である。それらの感情の一部が、「ディック・アンド・ジェイン」の両親からは排除されている。かれらは喜び楽しむことは許されているが、怒り哀しむことは許されていない。特定の人間感情を否定されているかれらは、決して全人格的な存在ではなく、血の通った人間として描かれているのではない。「完全な人間」のように見える人間の不完全性であり、完璧に健康的であることの不健康性である。モリスンはアメリカの社会規範になつてくる英語教科書を、破壊的断片に解体して引用することによって、その完全性を否定しているのである。

トニ・モリスンは教科書「ディック・アンド・ジェイン」を

そのまま引用して「粹」にしたのではなかった。断片化し解体しながら物語に挿入している。教科書を全体像として代表させるのではなく、偏った断片を引用し、その断片をさらに断片化し、そのうえ解説困難なアルファベットの連なりへ変容していく方法は、「ディック・アンド・ジェイン」読本の意味の解体であり、描かれた家庭像の破壊である。すでにモリスンはその引用の方法、断片化の方法によって、「ディック・アンド・ジェイン」の世界を崩壊させる。「ディック・アンド・ジェイン」の価値観のまやかしを、すなわち「アメリカの夢」の偽善を、破壊的断片は批判的に提示していたのである。そこに作者の意図を読み取らねばならないだろう。

## 8 「健康的」な「狂気」の社会

コンフォームティを推進するアメリカ社会、あるいはアフリカン・アメリカンの存在を無化する「白人の体制」が敷かれた社会は、フーコーの言葉を借りれば、いかに「非狂気の無情な言語」<sup>24</sup>が支配している社会であるか。完全なる「健康的」な言葉がいかに「無情」であるか。人間性を喪失しているか。近代化とともに「狂気」が排除され「狂人」が隔離され隠蔽されることよってかれらが無化されていったように、排除の論理は貧困・弱者・非白人が存在しない社会を想定する。「アメリカの夢」の現実化に障害になる要素が取り除かれていくのである。それが「ディック・アンド・ジェイン」の世界であり、「ニュー・イングランド・プリマー」に始まる種々のアメリカ

の英語教科書を支配する意思であった。ここでは「ブラック・スピーク」を含めた多声的な「アメリカ英語」が認識されることはない。

トニ・モリスンはそのような偽の「アメリカ英語」を、偽のアメリカ社会を解体するために、「ディック・アンド・ジェイン」読本を断片化し、解体し、ピコーラを創造する。破壊的断片の教科書は、黒人社会のアンチテーゼとして対照させるために「粹」を成すのではない。作品内容と緊密に絡み合っているために、モリスンは「粹」を書き込んだのである。

レヴィ・ストロースが未開と文明の連続性を打ちたてようとし、フーコーが狂気と理性の包摂される社会を分析したように、作家モリスンはピコーラに代表される「狂気」と「非健康」と、そして「アフリカン・アメリカン」を含んだアメリカ社会を描き出そうとした。「アメリカの夢」とともに融合して存在する否定的な面を強調しながら、アメリカ社会の真の姿を描き出そうとする。それこそが「一つの真実」であり、まさにそれが「ブラック・スピーク」の行為である。

『青い目がほしい』の最後の章で、語り手クローディアは、「ピコーラは狂気の域へ足を踏み入れた」(159)と語る。父親のチョリーは救貧院で死に、母親とピコーラは町のはずれへ引っ越して行く。ピコーラが母親と一緒に住むのは「小さな茶色の家」で、その家の「どこかに」ピコーラが住んでいる。「町はずれ(オン・ジ・エッジ)」という周縁性、および「どこかに」という曖昧性によって、ピコーラが存在と意味づけは実体を薄められていくように映るのだが、それは決して実体の剥奪を指示

しているのではない。ピコーラは「今日でも、ときおり」(159)ごみを漁り食べ物を探している姿が目撃される。ピコーラは生き長らえているのであり、その存在は消滅していない。いやかえってピコーラの存在と意味づけを、作者は最後の数パラグラフで描き出したといえよう。

最後の部分が『青い目がほしい』の最終的な主張になっている。語り手とピコーラの関係のみならず、「ディック・アンド・ジェイン」読本の破壊的断片と作品全体の意味とが統合されていくのである。

モリスンはピコーラが「狂気」へと向かう道筋をたどりながら、ピコーラの存在と「狂気」の存在を認識する社会を、肯定と否定を包括する社会を描き出している。「ディック・アンド・ジェイン」読本は、いわば「狂気」を排除した世界であり、「健康」が支配する楽園であった。そこでは理性が「荒れ狂う非理性」に対して「勝ち誇ったように支配権をふるう」<sup>25</sup>のであった。そのような二項対立的な社会のありかたを否定するために、モリスンは『青い目がほしい』という作品を書いたのではないか。フリーコーは『狂気の歴史』を、「パスカルによると『人間が狂気じみているのは必然的であるので、狂気じみしていないことも、別種の狂気の傾向からいうと、やはり狂気じみていることになるだろう』」(7)と書き出している。さらにパスカルを引用しながら同じことを、「狂人でないことは、別の流儀の狂気によって狂人であることなのです」(369)と語っている。ピコーラを抹殺することはやはり不可能なのである。この人間社会を「狂気」のピコーラの存在をなくして描き出すことはできない。アメリカ社会をアフリカン・アメリカンの構成員なくしてはも

はや描き出すことはできない。モリスンによる「ディック・アンド・ジェイン」の破壊的断片化という作業は、「狂人でないことは、別の流儀の狂気によって狂人であることなのです」ということを例証することであった。

フリーコーは『狂気の歴史』の第二部第一章「種の園における狂人」で、病気について記している。神は病気を容認し、かつてそれは人間への懲罰であったのだが、今では「神は病気を育てている」<sup>(214)</sup>という。「なるほど人間の側では病気は無秩序と有限と罪の印であるけれども、病気を創りだした神の側では、つまりは病気の実相の側では、病気は筋道のおつた生長作用である」<sup>(214)</sup>とも述べている。『青い目がほしい』におけるピコーラの狂気もまた「筋道のおつた生長作用」として眺めることができるし、フリーコーの言葉にならつていえば、病気を「無秩序と有限と罪の印」とのみ理解するべきではないのである。ピコーラの状態はたしかに「無秩序と有限と罪」を象徴しているように映るが、それは「神」の創り出す「人間社会」においては必然の要素であり、「無秩序と有限と罪」が否定された人間社会は存在しない。

ピコーラの特異な社会的状況・身体的表情こそが、語り手クローディアの世界認識を助けている。再三フリーコーを引用すれば、「狂人は人間の基礎的な真理を明るみに出す」<sup>(541)</sup>とフリーコーは記述する。人間の成長過程によって隠蔽されていく諸々の人間的な欲望を、「狂気」は白日のもとにさらけ出し、その結果、ようやく真理が明示される。物語の最後で「狂気」に陥ったピコーラ、騙されても凌辱されても死ぬことのなかつたピコーラの存在の意味は、フリーコーの「狂気」の解釈と重ね合わ

せたときによく理解しうるであろう。ピコーラの「狂気」によって「人間の基礎的な真理」が明らかにされるのであり、アメリカ社会に潜む「一つの真実」が提示されてくる。『青い目がほしい』の最後の数パラグラフによって、モリスンは人間社会の、アメリカ社会の相反する様相・表現をさまざまに並列させ畳み掛けるように描写しながら強調する。

その例として第一に、「あいだ(ビトウィーン)」という単語に注目しよう。「あいだ(ビトウィーン)」という前置詞がつなぐ二つの両極的な言葉は、その相反性が重要なのではなく、「あいだ(ビトウィーン)」という空間的状况が重要である。空間的な引き延ばしをあらわす「あいだ(ビトウィーン)」が、実は質的な引き延ばしを示唆している。ベルクソンの「純粹持続」という概念に照らして考えてみると、あらゆるものを「あいだ(ビトウィーン)」という相のもとに理解することであり、「あいだ(ビトウィーン)」でつながれた両者の相互作用を認識すること。両者はそれぞれに存在しつつなお一方が他方に影響を及ぼし、さらに発展へ向かうことがある。この「持続」のなかにおいて、ピコーラは運動作用を行う。ピコーラがごみ漁りをする姿を作者は、ピコーラが「タイヤの輪とひまわり」、「ココアの壘とミルクウィード(とうわた)」との間、そして「世界中の排泄物と美しさ」のなかで歩き回っていると書く。

自然の美しさであるひまわりやミルクウィードと対照されるのは、アメリカ社会を代表する自動車文明でありアメリカの代表的な人工的飲み物であるココアである。すでにその二項対立によってモリスンは白人文明と隣接しながら命をつな

いでいる小さな自然の植物を描き出し、白人文明のなれの果てである不必要になったタイヤの「輪」と空っぽの「壘」を強調する。文明が排泄したものと小さな自然の間をピコーラは、そしてアメリカ社会に暮らすアフリカン・アメリカンは、どうにか自分の道筋を確保しながら歩んでいる。ピコーラの動きはすでに踏み固められ決定された道筋をたどっているのではなく、ごみを拾ったり引き抜いたりしながら「自分の道」(159)を確保して歩んでいる。その行程はアメリカ社会におけるアフリカン・アメリカンの生きかたに重なっていく。かれらに決定された道筋などはなく、アメリカ文明の「排泄物」の近くに身体を寄せながらどうにか自分の呼吸の場を発見し、その空間を摘み取りながら細々と生命をつないでいるのである。

第二に、ピコーラの存在を中心に捉えた分析である。作者の強調する「あらゆるもの」が対照的な二つの項目を含んでいる。それは「あいだ(ビトウィーン)」という状況の言い換えと見なすこともできるだろう。

「世界中の排泄物と美しさ、それこそピコーラそのものである」(159)と語られる箇所がある。ピコーラはあらゆるものを取り込みうる存在として描かれ、周囲の人々が排除するものをピコーラは甘んじて受け入れる。受け入れにおいてピコーラの意志があるとは考えられないが、その状態を語り手のクロウディアは次のように説明する。

「わたしたちがピコーラの上に投げ捨てたあらゆるごみ・排泄物、それらすべてをピコーラは吸収したのであり、わたしたちの美しさはまず最初はピコーラのものであったのだが、それをピコーラはわたしたちに与えてくれた」(159)。

社会から排除されるピコーラ自身が、逆説的にあらゆるものを吸収する容積を持ち、無力に映るピコーラがそれらを果てしなく吸収する強い力を備えている。それがこの作品におけるピコーラの存在理由であり、ピコーラの意味である。「ディック・アンド・ジェイン」読本の一面的な世界を想起しながら、ピコーラの身体的世界Ⅱ状態を対照させてみる。「あらゆるものを含むピコーラこそ、現実的な人間社会の姿であるといえるだろう。そのことを私たちに教授するピコーラは、今やピコーラ自身が新しい教科書、「ニュー・プリマー」になるのである。

クローディアが語った、「まず最初にピコーラのものであった」美しさとはいったい何を意味しているのか。それを作者は具体的に指示しない。それゆえ読者は次に続く文章からその「美しさ」を推定する作業をしなければならない。第三の二項対立的表示はこの文章にあらわれている。作者は語り手クローディアに次のように語らせる。

「わたしたちはみんな、ピコーラを知っている者はみんな、ピコーラによって自分たち自身を清めたのだった。ピコーラの醜さにまたがって立つとわたしたちはとつても美しかった。ピコーラの素朴さがわたしたちを飾り立ててくれ、その罪がわたしたちを正当化し、ピコーラの苦痛がわたしたちを健康にくれ、そのぎこちなさはわたしたちにもユーモア感覚があるのだと教えてくれた。ピコーラの表現力のなさはわたしたちを雄弁だと思わせてくれた。その貧しさはわたしたちを豊かにしてくれた。ピコーラの白昼夢でさえわたしたちは利用した。わたしたちの悪夢を鎮めるために」(159)。

すなわちピコーラとは周囲の人々へこれだけの影響を及ぼ

す力を持つている登場人物だったのである。たしかにピコーラは否定的な属性の持ち主であるように描かれている。貧しく醜くみだらな妊娠をしてしまう。けれども否定的であればあるほど、逆に周囲への力を発揮する人物として作者は描き出す。周囲の人々が勝手な思惑と利己的な目的でピコーラに接するのを寛大にも許し、それを受け入れ、その結果「わたしたち」を自由にくれくれたのだった。「わたしたち」は勝手に自分たちは強いのだという幻想を抱くが、それはピコーラの存在があるから可能である。ピコーラを鏡としてその反対の極に自分たちを位置づけ、自分たちは強いという錯覚を抱いているだけである。錯覚は現実ではなく、「自分たちの強さの幻想」(159)にかすぎない。

それはまた「ディック・アンド・ジェイン」の世界に登場する人々が抱く幻想であった。かれらは「アメリカの夢」の強さに錯覚を抱き、その夢を追うことが自分たちの強さを保証すると考えた。少なくともそう思い込まされていたのだったが、現実においてかれらはその「夢」に幻滅していく。それが「ディック・アンド・ジェイン」読本が終焉していく六〇年代のアメリカ社会であった。五〇年代のコンフォーミティの時代を経て、六〇年代にはヴェトナム戦争の悪化という政治的事件が大きくアメリカ人を変容させていったが、かれらはこの時代にアメリカ的価値観に対して初めて疑問を抱き始めたのである。トニ・モリスンが「ディック・アンド・ジェイン」読本を破壊的に断片化し解体した背後には、幻想でしかない「自分たちの強さ」を認識する目的があったと考えることができるだろう。

『青い目がほしい』の語り手クロロディアは続けて次のように言う。

「そしてそれは幻想だった。なぜならわたしたちは強くなかったのだから。攻撃的であつたにすぎない。わたしたちは自由でもなかつた。ただ気ままだったのだ。憐れみ深かつたのではない。お高くとまつていただけだ。善良だつたのではなく行儀よくしただけだつた」(159)。

このような二項対立を並べながら、ピコーラという対象へのかかわりがまつた多くの二項対立的な距離を保つていたのでもなければ、明白なるコントラストをあらわしていたのでもないことを、語り手は反省しながら認識し始めている。ピコーラによつて喚起される自分たちの行動は、自発的であるように見えて、じつさいは自分たちの「弱さ」から生まれてきたものでもあつた。弱いから攻撃的にならざるをえない。精神的に本当に自由であれば精神的に寛大になれる。ところが自分たちのほうがピコーラに比べて自由であると思ひ込んでいたのは、実質の伴わない優越感にしかすぎなかつた。クロロディアは後になつてようやく「ピコーラ」という読本が自分たちに教えてくれたことを理解するようになる。

「わたしたちはよき語法を英知の代わりにした。習慣をひねつて変えて成熟を刺激した。数々の嘘を並べ替えてそれを真理と呼んだ」(159)とクロロディアは言う。

「よき語法」とは「習慣」と相通じるであろう。短絡的に言えば「ディック・アンド・ジェイン」読本に見られる習慣・価値観・文法とみなしうる。本来、個人が知性を働かせねばならぬのだが、人間は「よき語法」と世間が認める言葉遣い・文法

に依存する。迎合するほうが気楽だからだが、それは「自己信頼」からはほど遠い。世間の習慣や価値観に惑わされることなく、個人で判断し行動できる独立した人間になることを自分たちは避けてきたのだと、語り手はここで初めて諒解する。世間を取り繕うために「数々の嘘」をつく。少なくとも自分の考え・感覚を排除して世間の価値観を取り入れねばならぬときがある。そのような「数々の嘘」の姿勢を取りながら、自己を正当化するためにはそれを「真理」と呼び慣わさねばならない。ピコーラを取り囲んだ人々は、とりわけ語り手のクロロディアは、偽りの真理の構築に苦悩した。クロロディア自身がアメリカ的価値観の虚偽に悩んでいたことは、子供のころクリスマスの贈り物にもらつた青い目の人形を破壊する行為にあらわれている。この作品は破壊的断片によつて「粹」づけられていたが、クロロディアは人形を壊し、親に言葉のない抵抗を示す。クロロディアは知性で理解し了解してはいなかつたが、アメリカ的価値観の虚偽を本能的に感じ取つていた。

ピコーラの教訓のなかでもっとも重要なことは、ピコーラがその存在によつて「わたしたちの悪夢を鎮め」させてくれたことである。そのために「わたしたちから蔑まれた」(159)にもかかわらず、ピコーラが「わたしたちにそうさせてくれた」(159)のである。「わたしたちはピコーラによつて自分たちのエゴを研ぎすまし、自分たちの性格をピコーラの壊れやすさで取り繕い、自分たちは強いという幻想のなかであぐらを掻きあくびをした」(159)のであつた。ピコーラの存在はそのような安心感をわたしたちに与え、それが社会の安定を生み出していた。子供のころには理解していなかつたピコーラの存在理

由を、大人になった語り手クロードディアは理解する。自分たちは「古い考えを新しく並び替えただけのものを神の御言葉の啓示」(159)と見なしていたのだったという認識にクロードディアは到達する。

いつぼうピコーラは「狂気」の領域に入つて行く。それはピコーラを受け入れない周囲の精神的環境から、すなわち「わたしたちから自分を守るため」(159)の「狂気」であつた。「狂気」の領域に入つたピコーラに、わたしたちはもはや関心を抱かなくなつたからにすぎないが、そのようにしてピコーラは自分を守つたとクロードディアは、子供時代にあつたピコーラとの関係の終焉を述べている。

だがその終焉が無意味で無産であつたのではない。クロードディアにとつてピコーラの存在は振りかえつてその精神形成を助けたのであり、人生観を根本的に左右する大きな出来事であつた。だからこそ『青い目がほしい』という回想の物語が成立する。語り手の回想はピコーラの存在に収斂している。この物語はアメリカの中西部の小さな町に住む醜い黒人の女の子と語り手の個人的なかかわり、社会と孤立した女の子どうしの少女時代の瑣末な体験が語られる。「少女小説」ではなく、アメリカ社会とそこに「生きる」アフリカン・アメリカンを認識し、その存在理由を明らかにする壮大なテーマを含んだ作品である。

## 9 攻撃的な沈黙・ピコーラ

「黙っていたのだつたけれど一九四一年の秋、マリゴールド

の花は咲かなかつた」(9)という書き出しで『青い目がほしい』は始まつた。「そして今、ピコーラがごみをあさつているのを見ると——いつたい何を。わたしたちが殺してしまつたものを？ わたしが語つたのは、マリゴールドの種を土中深く埋めすぎたのではなかつたということ、咲かなかつたのは地面の、土地の、この町のせいということだつた」(160)。これが結びの文章である。

『青い目がほしい』で作者がもつとも語りたかつたのは、花が咲かなかつたのは種を蒔いたアフリカン・アメリカンの少女のせいではないということ、周囲の地理的な要素と環境的な要素のせいだつたことである。しかもここで注意しなければならぬのは、「あの年、国中の地面がマリゴールドに敵愾心を抱いていたと今わたしは思っている」(160)と打ち明けていることである。「あの年」、すなわち一九四一年という年が意味を持つてくる。太平洋戦争が始まる年である。

語り手は、この土壌では特定の草木は花を咲かせず、特定の果樹は実を結ばない、と続ける。土地がその「意志行為」(160)を拒絶したときには、「わたしたち」はその「犠牲になるものに生き長らえる権利はない」(160)とみなして甘受するが、それは間違ひである。ところが語り手は、具体的なことはもはやどうでもよいと言う。

「すでに遅いのだから。少なくともわたしの町のはずれで、わたしの町のごみとひまわりのなかでは、もはやひどく、ひどく、ひどく遅すぎるのだから」(160)。

このようにクロードディアの回想物語は終わる。

ピコーラは「狂気」の領域に入り込み、もはや何を語ろう

にも遅すぎる。「町のはずれで、わたしの町のごみとひまわり」のなかにいるのはピコーラで、青い目が欲しい、美しくなりたいというピコーラの「意志行為」は拒絶された。「青い目」は白人の美の基準であり、拒絶は当然である。それでもピコーラに生き長らえる権利がないのではない。たしかにすべて遅すぎるかもしれない。「ひどく、ひどく、ひどく遅すぎる」と三度にわたって繰り返される強調は、ピコーラという生身の個人を「正気」の世界に戻すことの不可能性を言っているのだろう。けれども語り手を含めた周囲の人々にとつて、「間違っていた」と反省することが遅すぎると言っているのでは決していない。ピコーラを救済することができず、その悲惨な現実を抱えながらも、今、回想している語り手クローディアの社会状況は、「あの年」、あの時代とは異なっている。語り手が反省しているように「わたしたちは間違っていた」のであり、「意志行為」を、社会が抹殺してもなお生き延びる権利を、放棄してはならぬという認識に語り手は到達しているのである。

「狂気」のピコーラの存在が、語り手クローディアを含めた読者に象徴的に伝えているのはこの点である。悲惨なピコーラの存在を最後に映し出して物語が終わるのではない。二つの世界に生きる人々、醜いアフリカン・アメリカンの少女と白人社会の美しい人々を対照的に描き出すのが目的なのでもない。

「ディック・アンド・ジェイン」読本に表象される「正気」の世界から抹殺されたのは、「狂気」のピコーラという現実であった。抹殺されたはずであったが、ピコーラは生き長らえている。「狂気」のピコーラを眺める、他のアフリカン・アメリカンも生き長らえている。かれらは「ディック・アンド・ジェ

イン」の世界に含まれていなかったが、それでもアメリカ社会に存在し、その社会の構成員になつていく。ピコーラの教訓とその事実の認識であり、それが「ブラック・スピーク」である。ピコーラは作品のなかで饒舌に自分の境遇を語ることはなく、言葉を発する機会もごく稀である。ジル・メイタスは「ピコーラは小説の全般にわたってほとんど沈黙している」<sup>26</sup>と述べ、逆説的ながらその沈黙ゆえに饒舌になり、「モリスンはピコーラを沈黙する犠牲者に仕立てて、その苦悩をきわめて力強く表現している」<sup>27</sup>と分析する。沈黙するピコーラは、究極的な理性の沈黙である。「狂気」の領域へ入つていったが、それゆえさらに「饒舌に」存在を主張する。スーザン・ソクタグはそのような饒舌な沈黙を「攻撃的な沈黙」と表現した。

「狂気」のピコーラの現在へ注意を向けて語りを終えるクローディアは、キャスリン・アールが言うように、「自己を大胆に肯定」<sup>28</sup>している。クローディアは子供のころ金髪碧眼の人形を解体してしまつたが、それは具体的な人形を壊したのではなく、またコップに描かれた子役のシャーリー・テンプルを嫌つたのではなく、「外観のみで価値判断をする文化」<sup>29</sup>を破壊したかったのであり拒否したのである。それは白人文化と黒人文化という対照あるいは対立を助長することではない。白人の価値判断のみを否定するのではなく、皮相な価値判断を下す「世間」を批判し、愚かな人間の無批判的な同調性を弾劾している。

私たち読者には、『青い目がほしい』をアフリカン・アメリカンと白人の価値観の対立、「ディック・アンド・ジェイン」の世界と黒人の世界の対照を描いた作品と見なして納得す

る傾向がある。けれどもこの作品が普遍的な意味を持つのは、「ディック・アンド・ジェイン」の世界やシャーリー・テンプル、ベビー・ドールの文化が代表しているものが、アメリカ社会における白人と黒人の対立という領域に留まらないからである。それはもはやアメリカ社会の内部における価値観ではなく、一般に白人文化、ヨーロッパ中心主義の姿勢と読み換えることができるからである。ラファエル・ペレス<sup>30</sup>は次のように言う。

「このテキストのなかで（あるいはわたしたちの社会で）ホワイトとは人種の範疇ではない。むしろ非人種的なものであり、規範であり普遍的な基準である」<sup>30</sup>。

「ホワイト」<sup>31</sup>。「白人」はもはや人種の違いを指示する用語ではなく、「非人種的なもの」、人種の範疇を超えたものを指示するようになる。この千数百年の間、ヨーロッパあるいはキリスト教文化に代表される思想体系・文化の型が、私たちの知的世界・日常社会を支配的に構築し、その担い手であるヨーロッパ人<sup>32</sup>白人が世界の規範、普遍的な基準であるかのごとくに思い込ませられてきた。とりわけ過去二百年間はヨーロッパ世界が近代主義を標榜し、近代化を推進するにあたって中心的指導力を発揮し、世界の多くの人々がほとんど無意識のうちにその規範・価値基準を受け入れてきた。その結果、「ホワイト」とはそのような欧米の白人が生み出し築いている政治体系・文化およびその価値体系に直結して理解されるようになっていく。その「ホワイト」の文化へ異議申立てを行ったのがピコーラの存在である。白人の近代主義が踏みにじり、排除し無視してきたのは、「ピコーラ」たちであった。

あるいはまたこの作品に登場する、その他の周縁的な女たちを例に挙げることもできる。語り手クロードディアの母親が忌み嫌い、ピコーラは愛情とやさしさを求めて近づいていった、ピコーラの一家が住んでいた店舗の上のアパートに住む三人の娼婦である。かれらの名前がマリリー（またはマジリー・ライオン<sup>33</sup>フランス）、ポーランド、チャイナという不思議な組み合わせであるのにも作者の意図はあるだろう。「かれらの名前には取り込まれることを拒絶する姿勢が示唆されている」とガリーオン・グリユワルは言う<sup>31</sup>。フランス、ポーランドは第二次世界大戦中にナチス・ドイツに取り込まれ、中国は日本に取り込まれた。周縁的な登場人物である三人の娼婦は、ファシズム的な父権社会へ、中産階級的な社会へ取り込まれることからすり抜けて暮らしている。その職業じたいが支配的価値観の正道を行くものではないのだが、それにもかかわらず、あるいはそれだからこそかれら三人はよく笑い、よく食べ、そしてよく性的欲望を満たしている。あたかも幸せな人生を送っているかのように楽天的でにぎやかで楽しそうに見える。「ディック・アンド・ジェイン」読本の母親と父親が声も立てずに微笑んでいる様子とはまったく異なり、三人の娼婦の描写からかれらの声が聞こえてくるばかりか、食べ物の味が伝わってくる。そこに日常を逆転させるバフチンの「カーニヴァル的な笑い」を見るよりも、「これらの場所（フランス・ポーランド・中国）の文化的価値が崩壊することはなかった」<sup>32</sup>という指摘に深い意味があるだろう。すなわち三人の娼婦はその周縁的な職業にもかかわらず、かれらこそ逆説的ではあるが根源的に人間らしい欲望を満たしながら生きている。そこに支配的な価値観、取り込

み支配しようとするヨーロッパ中心主義に見られる父権的な姿勢に立ち向かう女たちの姿がある。かれらは「男たちと戦っている」<sup>33</sup> 三人の女である。

『青い目がほしい』は、「ホワイト」の文化・価値体系のひずみを三人の女によつて、そして何よりもピコラによつてあらわし強調した小説作品である。「ホワイト」とはもはや人種的な指示語としての「ホワイト」ではなく、広くヨーロッパ近代主義の価値体系をあらわすものとして「ホワイト」の文化を指す言葉になる。

資本主義的合理主義の近代化の世界では、有無を言わず画一性・同一性の価値を奨励した。「正しい」人間であればだれもが同じものを欲望せねばならない。その「同一性信仰」が「アメリカの夢」であるかのように錯覚する。『青い目がほしい』の登場人物たちは、「デイク・アンド・ジェイン」読本の文化的価値観が推進したそのあやまりを問いただしている。

そもそも「アメリカの夢」の追求は、同一性から離反する精神によつてなされてきたはずである。体制の価値観ではなく自己を頼りに理想を実現する、その頑強な姿勢こそ「アメリカの夢」の追求の必須条件であった。本来それは個人的なものであり、個人主義・自己信頼によつて確立されるものである。ところがいつぼうでは、建国の歴史的展開から「アメリカニズム」に収斂される姿勢が求められた。イギリス人と差異化しつつ、ひとつのアメリカ人像を想定し、それにだれもが近づいていかねばならない。すなわち同一性が求められたのである。「新世界」アメリカであるからこそ可能になるさまざまな「アメリカの夢」は、その意味では同一の夢の追求であった。土地所有、

金銭的に豊かな暮らし、信教の自由、階級制度からの自由などであった。

近い過去において、「アメリカの夢」がもつとも画一化したと思われる時代は、「デイク・アンド・ジェイン」読本が全米の八〇パーセントの小学校で使用された時期と重なる。一九五〇年代の個性が喪失された時代である。二一世紀の今を生きる私たちは、複合文化主義・マルチカルチュラリズムが唱えられるようになった七〇年代・八〇年代を経験している。その複合文化主義・マルチカルチュラリズムのアメリカ社会を肯定して描かれていたのが『青い目がほしい』であった。複合的価値観がアメリカ的価値観であると主張したのである。

このような場面がある。クローディアの母親が歌うブルースは、「困難な時代、悪い時代、誰かに捨てられてしまった時代」(24) という悲惨な内容だったが、それでもクローディアは母親の歌声の甘さ、うっとりとした母親の目を見つめながら、「つらい時代に自分の身をおいてみたい」(24)と願う。これはクローディアがアフリカン・アメリカンとして自覚したことを意味している。「悲しみもかあさんの歌声によつてグリーンやブルーに色づけられ、歌の言葉からあらゆる悲嘆の意味を取り除いてしまふのだった」(24) とさえ感じる。苦痛は耐えうるばかりか甘美でもあり、歌う瞬間によつてかれらは生き延びる力を確かなものにする。

ラングストン・ヒューズはブルースについて、『初めてのジャズの本』で次のように語る。

「ほとんどのいつも悲しい歌だ。仕事にあぶれたり、文無しだったり、すきっ腹だったり、ふるさと遠く離れていたり、汽車に

乗りたいのに切符がない。好きな人が去って行き一人ぼっち」(22)になつてしまう歌。それにもかかわらずブルースには、「その悲しみの背後にほとんどいつも笑いと力がある」(23)。

ブルースはこのように両極的な特質を備え、悲しみをうたいながらも「笑いと力」を忘れてはいない。そのような音楽であるからこそ、アフリカン・アメリカンのみならず、世界の人々にブルースやジャズが好まれるのだろうとヒューズは言う。悲惨な状況を歌いながら、それを吹き飛ばす「笑いと力」がある。アフリカン・アメリカンの生への執着と、したたかに生き延びる巧みな知恵がある。ヘンリー・ルイス・ゲイツ・ジュニアは、それを「シグニファイイング・モンキー」という伝統を通して検討しているが、ヒューズは次のようなブルースの歌詞を紹介しながら、アフリカン・アメリカンの生へのしたたかさを示している。

「俺は鉄道線路へ向かつて歩く。そして頭をレールにのせて、鉄道線路へ、そして頭をレールにのせて——それで列車が見えたなら、ひよいと頭を持ち上げる」(23)。

この歌詞には、「シグニファイイング・モンキー」という身振りと同様のユーモア感覚がある。

もう一つの場面を挙げておこう。クロードディアは、クリスマスへの贈り物には白人の青い目のベビードールをもらうより、祖父母とともに過ごしたかったと回想する。「自分のものにする」と、物を所有するなんて金輪際いやだった」と言う。それよりも「クリスマスの日には何かを感じたかった」、「おばあちゃんの台所で小さな椅子にすわって、膝にライラックの花を

いっぱいのおせておじいちゃんが自分のためだけに弾いてくれるヴァイオリンを聴いていたかった」(21)。

プレゼントをもらい、品物を所有し、即物崇拝の文化を教え込まれるより、祖父母からのお話、アフリカン・アメリカンの文化伝統を継承することを望んでいる。もちろん子供だった当時、その理由を認識していたのではなかった。クロードディアの感性は無意識に、自分の民族的存在理由を明らかにすることを望み、アフリカン・アメリカンの文化を渴望する。画一的なアメリカ的価値観・単一性のアメリカ文化へ抵抗していたのであった。

ブルースが即興で歌われ、歌詞の変容が許されるのみならず、変容こそがブルースの特質であるとき、まさに「ドイツ・アンド・ジェイン」読本が描き出している画一化され固定化され、硬直したアメリカ的理想像とは相反する資質が奨励される。ブルースに抛り所を見出すクロードディアは、同一化・固定化に恐怖するときえ言つていいだろう。固定された秩序・同一化・規格品になつてしまったアメリカの夢は偽善でしかない」と、少女だった語り手クロードディアは直感していた。

ピコーラは最後にごみ漁りをしているが、ごみのない世界、ディズニーの「魔法の王国」が目指す極度に清潔な世界は現実ではない。それは非現実であり、ヴァーチャル・リアリティの世界である。そして完璧に清潔な「王国」こそ、私たちに不安と恐怖を生み出し植えつける。民族純粋主義と同様に、熱狂的な清潔信仰こそ「狂気」の領域にかぎりなく近づいていくことにもなるのである。

ピコーラの醜さも「狂気」という精神の逸脱もアメリカ社

会の現実である。『青い目がほしい』のピコーラが教えるのは、金髪碧眼という美の基準の不健全さ、いつも健康的に微笑んでいるという「健康信仰」の欺瞞性である。このようにして『青い目がほしい』は、ピコーラを登場人物とする新しい教科書、「ニュー・プリマー」に変身する。

トニ・モリスンは『青い目がほしい』によって、「ブラック・スピーク」を実践した。新しい教科書を作り出したのである。そのために作者がまず行ったのが、アメリカの典型的な教科書「デイック・アンド・ジェイン」読本を断片化し解体することであった。「デイック・アンド・ジェイン」の破壊的断片の表示は、その世界が支持する規範を否定することであったが、同時に、画一化された完璧な世界はすでに内部から崩壊していることを提示することであった。モリスンの『青い目がほしい』は、二項対立を際立たせたのではなく、ピコーラの「狂気」が自然であることを伝える。ピコーラが「狂気」に陥ったのは青い目を獲得しなかったからではない。完璧であることを押しつけてくる社会の規範に対応する能力がなかったからである。

ごみ漁りをするピコーラを、清潔、すなわち「人間らしさ」からほど遠く、その生きかたを、健康的な社会の構成員の姿からほど遠いと切り捨てることができるだろうか。「狂気」であるのはピコーラなのか、画一的な社会の規範であるのか。社会の精神構造の根源的な問題を俎上にのせ、私たちに既成の規範に疑義を呈する強い姿勢と勇気を教えているのがモリスンの『青い目がほしい』という「ニュー・プリマー」である。

## 10 娼婦の呪文「健康は不健康、不健康は健康」

モリスンは、エドガー・アラン・ポウの『アーサー・ゴードン・ピムの物語』を分析し、白いイメージに注意を向け、主人公が肌の色の黒い人間と遭遇したあと、あたりの情景描写で白さが異様に書き込まれていることを問題にする。

「白い経帷子のような人間の形」、「雪のように完璧に白い」肌という描写が、すべて「黒さ」と出会ってから始まるとモリスンは指摘し、「現地の人々を恐怖に陥れたのは白さであった」と述べる。<sup>34</sup>

これを言い換えれば、ピコーラの「狂気」が恐怖であるのか、「デイック・アンド・ジェイン」の白い完璧な「健康性」が恐怖であるのかと問い直すことが可能だろう。あるいはまたこう問い直してもいい。ピコーラが本当に「狂気」の人になったのか、それとも健康幻想こそ「狂気」なのか。

『青い目がほしい』には三人の娼婦が登場した。愛と美について語る三人の娼婦は、『マクベス』の三人の魔女を想起させる。「きれいはきたない、きたないはきれい」とつぶやきながら大鍋をかき混ぜる魔女たちを、「本当の愛」を解体し曖昧化させる娼婦と並べてみてもいい。ピコーラは三人の娼婦のお気に入り、ピコーラもかれらが好きだった。語り手はその場面を回想の現在において遠くから眺め、「健康は不健康、不健康は健康」とつぶやくのであろうか。

- (1) Antonio Brown, "Performing 'Truth': Black Speech Acts," *African American Review*, 36.2 (Summer 2002), 213-25.
- (2) Theresa M. Tower, "Black Matters on the Dixie Limited: As I Lay Dying and *The Bluest Eye*," Carol A. Kolmerten et al ed., *Unflinching Gaze: Morrison and Faulkner Re-Envisioned* (Jackson: UP of Mississippi, 1997), 125.
- (3) Vaughn Shatzer ed., *Webster's Blue-Backed Spelling Book & New England Primer* (Oklahoma City, OK: Hearstone Publishing, 1998), non-paged.
- (4) Thomas H. Johnson, *The Oxford Companion to American History* (New York: Oxford UP, 1966), 572. Paul Leicester Ford ed., *The New-England Primer: A History of Its Origin and Development* (New York: Dodd, Mead, 1897), 19. 246頁 150年間で三百万部が売られたこと。
- (5) Shatzer, non-paged.
- (6) Charles F. Heartman, *Non-New England Primers* (Highland Park, NJ: Harry B. Weiss, 1935), xvii.
- (7) Heartman, xi.
- (8) Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: Avon Books, 1977).
- (9) Patricia Crain, *The Story of A: The Alphabetization of America from The New England Primer to The Scarlet Letter* (Stanford: Stanford UP, 2000), 124.
- (10) Nancy Cott, *The Bonds of Womanhood: "Women's Sphere" in New England, 1780-1835* (New Haven: Yale UP, 1977), 15.
- (11) Crain, 105-6.
- (12) Crain, 126-7.
- (13) Crain, 125.
- (14) Douglas, 66.
- (15) Douglas, 116.
- (16) Carole Kismaric and Marvin Heiferman, *Growing Up with Dick and Jane: Learning and Living the American Dream* (New York: HarperCollins Publishers, 1996), Non-paged.
- (17) Amazon.com, Editorial Review of *Growing Up with Dick and Jane: Learning and Living the American Dream* by Carole Kismaric, Marvin Heiferman, 1996.
- (18) Kismaric and Heiferman, *Growing Up with Dick and Jane: Learning and Living the American Dream*, 15.
- (19) Karal Ann Marling, *As Seen on TV: The Visual Culture of Everyday Life in the 1950's* (Cambridge: Harvard UP, 1994), 5.
- (20) Marling, 250.
- (21) Donald B. Gibson, "Text and Counter-text in *The Bluest Eye*," Henry Louis Gates, Jr. and K. A. Appiah, eds., *Toni Morrison: Critical Perspectives Past and Present* (New York: Amistad, 1993), 160.
- (22) Naomi R. Rand, *Silko, Morrison, and Roth: Studies in Survival* (New York: Peter Lang, 1999), 41.
- (23) Tower, 124.
- (24) シンヤル・ローリー『狂気の歴史』 田村徹訳 (新潮社、一九七五年) 九五頁。
- (25) 同前、同頁。
- (26) Jill Matus, *Toni Morrison* (Manchester: Manchester UP, 1998), 48.
- (27) Matus, 49.
- (28) Kathryn Earle, "Teaching Controversy: *The Bluest Eye* in the Multicultural Classroom," Nellie Y. McKay and Kathryn Earle, eds., *Approaches to Teaching the Novels of Toni Morrison* (New York: Modern Language Association of America, 1997), 33.
- (29) Earle, 33.
- (30) Rafael Perez-Torres, "Teaching and Erasing: Race and Pedagogy in *The Bluest Eye*," *Approaches to Teaching the Novels of Toni Morrison*, 24.
- (31) Gurleen Grewal, *Circles of Sorrow, Lines of Struggle: The Novels of Toni*

- Morrison (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998), 38.
- (22) Grewal, 38.
- (23) Grewal, 38.
- (24) Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* (New York: Vintage Books, 1998), 32.
- 石田文雄
- Brown, Antonio. "Performing 'Truth': Black Speech Acts," *African American Review*, 36.2 (Summer 2002): 213-225.
- Cott, Nancy. *The Bonds of Womanhood: "Women's Sphere" in New England, 1780-1835*. New Haven: Yale UP, 1977.
- Crain, Patricia. *The Story of A: The Alphabetization of America from The New England Primer to The Scarlet Letter*. Stanford: Stanford UP, 2000.
- Dick and Jane as Victims: Sex Stereotyping in Children's Readers*. Princeton: Women on Words & Images, 1972.
- Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. New York: Avon Books, 1977.
- Earle, Kathryn. "Teaching Controversy: *The Bluest Eye* in the Multicultural Classroom." *Approaches to Teaching the Novels of Toni Morrison*. 27-33.
- Foresman, Scott, ed. *Fun with Dick and Jane: A Commemorative Collection of Stories*. New York: Collins Publishers, 1996.
- Gallant, Marc Gregory. *More Fun with Dick and Jane*. New York: Penguin Books, 1986.
- Gibson, Donald B. "Text and Countercontext in *The Bluest Eye*." Eds. Henry Louis Gates, Jr. and K. A. Appiah. *Toni Morrison: Critical Perspectives Past and Present*. New York: Amistad, 1993. 159-74.
- Grewal, Gurleen. *Circles of Sorrow, Lines of Struggle: The Novels of Toni Morrison*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1998.
- Hartman, Charles F. *Non-New England Primers*. Highland Park, NJ: Harry B. Weiss, 1935.
- Hughes, Langston. *The First Book of Jazz*. Hopewell, NJ: The Ecco Press, 1997.
- Kismaric, Carole and Marvin Heiferman. *Growing Up with Dick and Jane: Learning and Living the American Dream*. New York: HarperCollins Publishers, 1996.
- Leicester, Paul Ford, ed. *The New-England Primer: A History of Its Origin and Development*. New York: Dodd, Mead, 1897.
- Marling, Karal Ann. *As Seen on TV: The Visual Culture of Everyday Life in the the 1950's*. Cambridge: Harvard UP, 1994.
- Matus, Jill. *Toni Morrison*. Manchester: Manchester UP, 1998.
- McKay, Nellie Y. and Kathryn Earle, eds. *Approaches to Teaching the Novels of Toni Morrison*. New York: Modern Language Association of America, 1997.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. New York: Washington Square Press, 1970.
- . *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. New York: Vintage Books, 1992.
- Pérez-Torres, Rafael. "Tracing and Erasing: Race and Pedagogy in *The Bluest Eye*." *Approaches to Teaching the Novels of Toni Morrison*. 21-26.
- Rand, Naomi R. *Silko, Morrison, and Roth: Studies in Survival*. New York: Peter Lang, 1999.
- Shatzer, Vaughn, ed. *Webster's Blue-Backed Spelling Book & New England Primer*. Oklahoma City, OK: Hearstone Publishing, 1998.
- Tower, Theresa M. "Black Matters on the Dixie Limited: *As I Lay Dying* and *The Bluest Eye*." Eds. Carol A. Kolmerten et al. *Unflinching Gaze: Morrison and Faulkner Re-Envisioned*. Jackson: UP of Mississippi, 1997. 115-27.
- 入江曜子『日本が「神の国」だった時代——国民学校の教科書と「おぼ」』東京：岩波書店，二〇〇一年。

W・E・B・デュボイス『黒人のたましい』、木島始他訳、東京…岩波書店、一九九二年。

ミハイル・バフチン『小説の言葉』、伊東一郎訳、東京…新時代社、一九八〇年。  
ミシエル・フーコー『狂気の歴史』、田村俣訳、東京…新潮社、一九七五年。